2015 年度第 2 回研究会の報告

日時：2015 年 6 月 20 日（土）14 時から 17 時

会場：戸山キャンパス 33 号館 7 階、現代人間論系室 2（702）

このたび開催された「信頼社会」研究の 2015 年度第 2 回研究会では、参加者約 15 名とともに、二つの話題提供と質疑が行なわれた。話題提供者は、御子柴善之（本学教授）と森由利亜先生（本学教授）である。

御子柴善之（本学教授）「『信頼回復』という問題」のまとめ

本報告では、第一に、信頼における「善」と不信における「善」とを対比し、後者が実践に「外的な善」であるのに対し、前者は実践に「内的な善」であることを指摘しつつ、それを義務論的に読み替え、信頼が「不完全義務」であることを主張した。第二に、「信頼回復」の要件として法令遵守・透明性・説明責任が三つを挙げた上で、説明責任が最重要であること、さらには説明責任を限定的に捉えるべきことを、オニールの所説を手がかりとして論じた。第三に、説明責任の限定に関連して、社会の側に「許す」という構えが不可欠であることを主張し、「忘れられる権利」には正当性が認められることを主張した。第四に、信頼回復の前提となる人間観として、愚かさ、偶然、弱さを取り上げ、それらを踏まえて＜不断＞の信頼回復こそが社会のもつべき構えであることを論じた。質疑においては、信頼と不信との関係が話題の中心となり、双方が両立するという意見、また、不信なしには信頼回復はないという意見などが披露された。（御子柴記）

森由利亜先生（本学教授）「信と善と社会：前近代中国思想と『信頼社会』」の目次とまとめ

1、まえおき

2、五倫における「信」について

(1)五倫における信、(2)『論語』と『孟子』に見える朋友と信、(3)朋友と善。

3、「信頼社会」という言葉が夫馬進『中国善会善堂史研究』（同胞舎出版、1997）を想起させることについて

(1)善挙・善会・善堂、(2)多様な善会の種類、(3)明末当初の善会組織の特徴、(4)夫馬の

所謂「社会」、(5)夫馬が「社会」において期待するもの。

4、善会・善堂の思想

(1) 生生の思想（万物一体の仁）、(2)「無徴不信」（証拠がなければ信じない）、(3)朋友の間に成り立つメンタリティー「信」。

5、善挙と応報

以上の項目にしたがって、本報告前半ではまず「信頼」という和製漢語の使用の歴史は比較的新しく、trust の訳語として「信用」「信任」などよりも遅れて、明治中期以

降に使用されるようになったことを指摘した。その際、**trust** の訳語として「信賴」の語よりも早く「信」の語が使われていたことに注意する。古来、「信」は所謂「五倫」の中で、「朋友」という、血縁や君臣関係などの外部的な所与の規範からはとりあえず解放されている、同等 **peer** な関係において成立する徳である。開かれた対等な地位にある個人が相互に誠意をもって結合する態度を表象する用語として、「信」という語が **trust** の訳語に選ばれたものと理解できるのである。

後半では、以上のような「信」が「社会」と強く結びついた（「信賴社会」が成り立った）と解釈できる事例として、17世紀から20世紀初頭の中国において展開した慈善活動を組織する社会現象、善会・善堂の状況を夫馬進『中国善会善堂史研究』（同朋舎出版、1997）によって紹介した。これを通じて、近世東アジアにおいて「信賴社会」に相当する状況が育まれる機運があり得たこと、それを探そうとする史学者の視点があること等に注目した。（森先生記）

次回の研究会は、10月17日（土）、33号館第10会議室において開催される。当日は、高橋敏夫先生（本学教授）と他一名に話題提供をいただいて議論を行う予定である。（報告書とりまとめ：御子柴善之）